

## 冬の街灯

国際コミュニケーション学部大学院

夏目 晶子<sup>しょうこ</sup>



図書館ご利用の皆さん、こんにちは。忙しかった秋セメも終わり、ふと寂しさを感じる時、私はよく図書館を利用します。失われかけた私自身に新しい自分らしさを探そうに、図書館で本を探します。寒さが身に伝えるとき本は私に情熱を与えてくれます。

今はもうすっかり冬。私は現在、大学院国際コミュニケーション研究科コミュニケーション専攻の修士課程1年に在学しています。大学院の魅力は私自身が興味を持った事柄つまり研究テーマを自分で絞り込んで徹底的に追究できるというところに有ると思います。学部生で例えるとしたなら、毎時間がゼミ（演習）の時間であるという事になります。しかも、毎時間がレポーター（報告者）といった感じです。ですから、ひとコマひとコマの授業が大変充実しています。皆さんもレポーターの経験がおりと思います。が、レポーターは資料をしっかりと集めなければなりません。

資料検索には図書館は欠かすことは出来ません。以前の検索方法は検索カード方式だったんですが、現在では読者の皆さんも御存知の通りパソコンで簡単に検索出来ます。キーワードで検索出来ますので大変便利になりました。分からない時はやさしいレファレンスの方が親切なアドバイスをして下さい。読者の皆さんも困った事が有りましたら、私のように気軽にレファレンスの方に聞いてみて下さい。図書館のイメージがすごく膨らむと思います。

私は現在、民俗学を専門に勉強しています。テーマは中華人民共和国の衣装の紋様です。この図書館には中国関係の資料が大変豊富に所蔵されています。こんなところにも愛知大学が大変中国との関わりが強く、また中国研究に情熱を注ぎ込んでいることが感じられます。私もこれらの礎になればと頑張っています。

独りで迷っている時、図書館のドアを叩いてみては如何でしょうか。きっと心の暖炉があなたを迎えてくれるでしょう。

## 私と本と図書館と…

現代中国学部 村上 真理



本がとても好きだったらしいです…。母に聞いた話なのでよくは覚えてないのですが、私は小さいころから絵本や小説が大好きだったそうです。寒い冬の夜に、母の手がかじかむまで本を読んでくれたことは不思議と覚えています。毎日のように昼

は祖母に、夜は母に本を読んでもらっていたので私自身が本を自然に好きになったのはある意味当然の成り行きだったのかもしれません。母が公民館兼営の図書館に初めて連れて行ってくれたのが「いつ」だったのかというのは…実はあまり覚えていないのです。

小さな図書館でした。

難しい本よりも、むしろ児童向けの本が多くそこにはおかれていた記憶があります。普段はあまり人気（ひとけ）のない図書館で『不思議の国のアリス』や『ナルニア国物語』その他の児童文学を気ままに読んでいた私でしたが、中学、高校のテスト期間が近づいてくると、小さな図書室の机は中学生や高校生の「おにいさん」「おねえさん」でいっぱいになり、そのときばかりは自分が読んでいる物語よりも鉛筆の音や、単語帳をめくる音が耳につき、自分の居場所のひとつがなくなってしまった気がして、そそくさとその小さな図書館を後にしたものです。

その憂鬱な時期、私が見つけた一つの楽しみにしていたのが「移動図書館」でした。聞いたことがある方はいるでしょうか？私の町では、大型のワゴン車の中に本棚を入れてそこに本をぎっしり詰め込んだ「移動図書館」が各区画の公民館に定期的に来ていたのです。私の母はそのころ公民館で事務の仕事をしていましたから、中央の公民館から連絡が入るとそのことを町内の放送で流すんです。小さな町の公民館ですから、放送を入れるのも母かもう一人の事務員さんでした。私は母が、よくとおるきれいな声で移動図書館が来ることを告げるのを聞くと、なんだかわくわくしたものです。

今、私はもう大学生で、愛知大学の名古屋図書館で学生アルバイトをしています。本好きな私には適職だと思います。ここは私が今まで過ごしたどの図書館よりもはるかに大きくて、初めて来た時には迷ってしまいました。（今は隅まで案内できますヨ！）しかし、図書館にいと時折懐かしく思い出すのです…。小さな図書館と、もっと小さな移動図書館のことを…。